

教職大学院

Newsletter No. 87

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2016.7.23

人口減少と地方消滅の時代における 学習権保障の問題と教職大学院教育への期待

北海道大学大学院准教授 篠原 岳司

人口減少時代または地方消滅などと言われる今日、私たちはわが国の公教育制度が果たしてきた教育の機会均等の原理と改めて向き合っていくことが求められている。昨年4月に北海道大学に着任して以来、少しずつ北海道内の郡部の小規模高校を訪問しているが、上記は昨年秋にオホーツク海沿岸にある3つの高校を訪問した時に抱いた切実な思いである。これらの高校は、1学年1学級と既に最小の規模にまで生徒数が減少し、通常であれば既に募集停止も免れないほどの規模にあるのだが、これらの地域の中卒者たちが他地域の高校への通学が困難であるなどの背景から、北海道教育委員会が独自に「地域キャンパス校」という学校形態を設けて、特例の最小規模高校として存立している。

そんな極小規模の高校にいざ訪れてみると、その小ささを逆手に取った価値のある教育と出会うことができる。どの学校でも全生徒と全教職員が互いの顔と名前が一致する関係を築いており、生徒たちの学校生活はとてもしなやかで、笑顔と安心が溢れた教室が作られている。教師たちは生徒の個別の状況を捉えることができるため、同僚と一丸となり心の通った手厚い教育に努めることができている。また、高校生たちは地域そのものを学びと場とし、地域の産業や伝統文化に直接関わる中で、様々な人たちに見守られながら生きた学びを進めている。一方、「地域キャンパス校」であることから近隣の大規模高校より教員の派遣を受けることができ、学校は複数の科目展開や習熟度別の少人数指導にも対応できている。とはいえ、教員数は校長、教頭、養護教諭の他、教諭が8名であり、校務分掌や行事運営などの負担を考慮すると、限りある厳しい条件の

中で、地域子どもたちのために最良の教育を目指し奮闘する高校であることは間違いない。しかしながら、これらの学校と地域にはあきらめという文字はない。その地域で育つ目の前の子どもたちのためにいかなる質の教育をどのように目指していくべきか、これらの学校と教師はこの問題に必死に向き合い続けている。この北海道における現実、教育学において論じられてきた学習権の中身とその保障のあり方をまさしく問うているものと言える。

北海道はこの10年間、最も急速に高校が減少してきた都道府県の一つである（高校の減少率は14.4%で全国5位、減少数は48校減で全国1位）。北海道の高校の現況をもう少し述べるならば、2016（平成28）年4月の時点での1学年1学級の極小規模校が道立で42校（内5校が募集停止済み）、市町村立が16校（定時制を含む）であり、4校に1校が1学級校である。また入学者数の減少から学級減となり1学級校となったものが10校あり、本来の規模を維持するに困難をかかえる2学級校も増えている。一方で、人口190万人超の札幌市周辺（石狩学区）には5～8学級規模で44校（市立を含む。私学を除く。）が維持され、人口減少時代における選択と集中の現象が高校配置においても顕著に表れている。こうした現象は広域の北海道における固有の課題と言うこともできるが、しかし、義務教育

目次

- 巻頭言 (1)
- 院生紹介 (2)
- インターンシップ/週間カンファレンス報告 (9)
- 附属中学校第51回教育研究会ほか (14)
- 平成28年度第1回運営協議会 (15)

を含め、等しく教育を受ける権利を保障するというわが国の公教育制度原理に鑑みると、北海道の現状は人口減少と地方消滅の時代における学習権保障の揺らぎであり、その崩壊の危機が我々の間近に迫ってきていることの暗示と言える。

こうした現実における矛盾を捉えたとき、教職大学院における教師教育に何を期待したいかを最後に考えてみたい。私自身かつては福井大学教職大学院のスタッフであった。以下の期待は、その経験を踏まえてのものでもあるが、教育行政学者として、また北海道における課題に向き合う者として1つだけ述べてみたい。

それは、多くの教師たちに、制度原理と現実の教育との間、または子どもの姿との間に存在する矛盾と向き合う機会を提供することである。ここでいう制度原理とは、わが国で言えば憲法や教育基本法、国際的には子どもの権利条約など成文法において確認される学習権の総体であり、それを支える思想

的背景を意味する。教育が何かしらの目的を帯びた意図的な介入であるならば、いかなる原理を基礎としてそれを構築すべきかを考えることは欠かせないことである。また、急速な変化の時代においても思想的な背景や権利概念との関係から不易と流行を見定める判断力は、こうした矛盾との向き合いの中で培われるものではないだろうか。上で私が直面する学習権の内実への問いも、教育の最前線における教師の実践と省察から原理的意義を再評価する視点や再構築へのヒントが導き出されると期待する。教職大学院の場において実践と理論の往還に基づく学びが促進され、それによって各自の文脈における現代的な矛盾への解が一つでも導き出せるよう、私もまた共に実践研究に向かえたら幸いに思う。

院生紹介



五十嵐 洋行

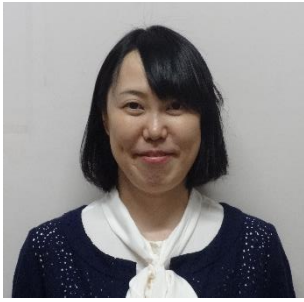
今年度、教職大学院ミドルリーダーコースに入学しました五十嵐洋行です。現在、福井大学教育学部附属小学校に勤務しております。勤務5年目となった今年度は、教員生活で初めての3年生の担任をさせていただいております。これまで、講師経験の3年間を含めると、今年度で教師生活11年目を迎えることとなりました。ミドルリーダーコースに入学しましたが、自分自身の中ではミドルリーダーという自覚はなく、まだ若手という意識がどこかにあります。今後、学校組織の中でミドルリーダーとしてどのような役割を果たしていけるのかを考えていきたいと思っております。

6年前に県教組の青年部副部長を経験させていただきました。その際、富山県や茨城県に行き、他県の先生方との出会いがありました。諸先生方と交流していく中で、今まで知り得なかったこと、県による文化の違い、教師としての授業に対する熱き思いなど多くのことを学ぶことができました。当時は、他県の先生方と交流することが新鮮で、いろいろ

いがらし ひろゆき（福井大学附属小学校）

ことを知りたくて興味津々に質問していたことを覚えています。しかし、今振り返ってみると、この教職大学院やラウンドテーブルでも全く同じような感覚を味わっている自分がいます。6年前と同じように、他県のことや同じ県内でも違う地域のことを知りたくていろいろな質問を試みたり、新たな発見に感動したり、他の先生方の実践を聞くことで自分自身の授業を省察したりと、とても多くの刺激をいただいています。月間カンファレンスやラウンドテーブルを終えると、今後への刺激を得て、それが明日への発憤材料になっていると感じています。

現在務めている附属小学校では、「聴き合い、つながりあって、学びを深める授業をつくる」を研究テーマとして掲げております。これまでの5年間、研究テーマを踏まえて算数科の研究を進めてきました。これまでの実践で見えてきたことを大切にしながら、今年度の実践研究に励んでいきたいと考えております。また、前述のような刺激もいただきながら、日々模索し、より子どもの学びを深める授業を展開していきたいとも考えております。みなさん、どうぞよろしくお願ひします。



黒田 和子 くろだ かずこ (福井大学附属小学校)

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コースでは、「学び」という営みを多方面から考える機会が多く存在し

ている。まるで、バラバラになったパズルのピースをつなぎ合わせているかのように、気楽に話し合いながら、いつの間にか形になって見えてくるものがある。このように、学ぶ者の見識を広げる場の設営は、よほど人間関係を構築する手法を知っていなければ、できるものではない。このような場を設営できる福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コースで、今年度から学べることに感謝したい。

さて、私が小学生だった頃の学校では、みんなと同じ事をすると先生に褒められた。もちろん、図書室で人と違う本を選んで読んだりもしたけれど、みんなと同じようにピアノが弾けたり、運動会の入場行進で足がそろったりすると安堵した。私にとって、作文を読むことや描いた絵を見せることは苦手なことであった。みんながどんな作品を仕上げたのかが気になって、なかなか筆が進まず、自然の風景や心理描写や、創意工夫もなんだか現実味のない恐ろしい行為であった。私は、知らず知らずに内向きになって人と同じということが重要になってしまっていたのだ。

大人になって、教職の仕事について十数年。私は、学ぶ側から教える側へ立場が変わってくると、子どもの行為や学びが、みんな同じでは、同じ物は生まれてくるけれど新しい物は創出されないのだと思うようになってきた。ならば、どうあればいいのだろうか。どのような授業がよいのか。そう考えると未知な部分が多かった。だから私は、これまでに教育

に関する言葉や教育観にたくさん触れようと努力してきた。「フロンティア教育」「コンピテンシー」「科学的読み」などである。政府からもまた、少子高齢化や高度情報通信化、科学技術イノベーションなど加速度に進む社会の変化に対応できる教育を思案して、多様な言葉が伝えられてきた。必死で理解しようとしたけれども、私の中身は混乱したのである。

そんなとき、福井大学大学院教育学研究科でのコミュニティに参加し、メンバーと具体的な仕事を想起してみた。すると、教育には変わらないものがあると思った。時代や教育方法、教育用語が変わっても、教育には変わらない事(普遍的価値)がある。それは「教育が子どもの豊かでよりよい生涯に資すること」である。メンバーはみな、様々な方法を試みて、あの手この手で子どもたちのよりよき人生を祈り最善を尽くそうとしている。たしかに私も、こうした普遍的価値を体現するために、その場に与えられたであろう言葉や教育観に触れながらも、奔走してきた。そこには、学んだ子どもが、その学びによって、この先及び生涯において豊かに生活して欲しいと願ってのことである。

人が生きていく上でもっとも大切な教育とは何か。よりよい人間関係を築き、豊かな社会を構築する上で何が、もっとも大事な学びなのか。明確な答えが出ない。ときには(大変に申し訳ないが)バラバラになったパズルのピースをしっかりと握りしめて教職についている。

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コースでは、「学び」という営みを多方面から考える機会がある。人とのつながりを大切にしながら、見識を深めて、形になって見えてくるものを増やしたい。



島田 裕美子 しまだ ゆみこ (福井大学附属中学校)

中学校3年生の国語の授業で「論語」の学習をしています。その中に「学びて時にこれを習ふ、また説ばしからずや。」という言葉があります。

4月から教職大学院で学ばせていただいています

が、子どもたちとこの論語の言葉を音読しながら、今の自分と重ね合わせていました。

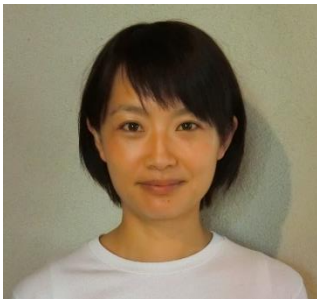
新採用から10年あまりたちますが、その間ずっと福井市内の中学校でたくさん子どもたちや先生方、保護者の方、地域の方々と関わってきました。その都度たくさんの方のことを教えてもらい、自分なり

にも「子どもたちが楽しいと思える充実した授業がしたい」、「どの子どもも活躍することができる温かい学級をつくりたい」と考えながら無我夢中で教師生活を送っていました。が、ややもすると1年サイクルでの学校生活の繰り返しになっていて、子どもたちの成長や学びを積み木のように重ねていくだけのことをしていただけののかもしれません。

しかし、附属中に赴任してから研究の波にのまれながら水面に漂っていた3年間を過ごし、大学院で学び始めた4年目の現在、自分の意思で波の中を潜って見ることができるようになってきました。附属中は「探究」「コミュニティ」をキーワードにした協働探究の研究に取り組んでいます。教科の学びだけでなく、学校生活全てを通して探究するコミュニティを形成し、協働でよりよいものをつくる学びを追究しています。それが、子どもたちだけでなく、教師集団にも教師の探究するコミュニティが組織されていることに気づいたとき、だから何も分からない状態で附属中に赴任しても、1年目の6月には曲がりなりにも研究集会で授業をすることができるの

だと実感することができました。日々の生活の中では、子どもたちにも教師にも脈々と受け継がれている学校文化や研究の本当の意味や価値というものなかなかじっくり考える余裕がありません。しかし、こちらでの学びを通して、改めてじっくりと、子どもたちとの向きあいかたや日々の授業のことや、職員室の仲間たちと、どのような授業や学年や学校をめざしてつくっていくのかということを考えさせられています。

冒頭の論語の続きは、「朋遠方より来たるあり、また楽しからずや。」です。自分の職場以外でお会いできる先生たちと、院生の皆さんと、また、遠方からも来られている皆さんと（時間を忘れて）、多くのことを語り合い、多くのことを学び、学ぶことを楽しみたいと思っています。どうぞ、よろしくお願いたします。



久保 文 くぼ あや (福井大学附属特別支援学校)

はじめまして、スクールリーダーコースM1の久保文(くぼあや)と申します。1年前より

福井大学附属特別支援学校で小学部の担任をしています。それ以前は新任地となる坂井市の高椋小学校で5年間特別支援学級の担任をしていました。

私が大学院に行ってみようと思ったのは、この初めての異動があったからなんだろうなと思っています。というのは、今回の異動は私にとっては突然の異動で、次年度はこんなことをしよう、こんなことが課題だと自分に明確にあった中での話であったということもあり、異動したことを自分の中で意味づけしなければ気持ちの整理がなかなかつかない状態でした。また、他校種間の異動ということ、初めての異動ということで、「当たり前」が少しずつ違うことに、自分一人で壁にぶつかってばかりの1年でした。でも、その壁は私を大きく成長させてくれました。壁にぶつかるたびに自分の大事にしてきたことを見つめ直し、自分の課題にも気づかされました。与えてもらった機会をとにかく一生懸命やりきることが自分の糧になるということにも気づくことができ、1年経ち異動したことの意味を自分の中でやっ

と見つけられた気がしました。そんな時に大学院への話をいただいたので、新しい何かに出会って新しい壁に出会えるチャンスと考え、「きっと行くべきなんだ」と思いました。

「大学院は自分とは校種も違う、経験年数も違う方々ばかりだけど、不思議と自分の抱えている課題と同じだったり、新しい自分の方向性を教えてもらったりすることばかりなんだ」と大学院に行かれていた先輩が言われていました。そして、その言葉は現在進行形で私も実感しています。

大学院で一緒に勉強させていただいている方々は本当に素敵な方ばかりで、「こんな風に子どものことを見たいな」「こんな風に授業を作ってみたいな」といつも思います。それだけでなく、悩みの種類は違うけれど、協働する相手やコミュニティは違うけれど、そこで大事にするべきことは不思議と同じで、毎回お話を聞いているだけで、明日へのヒントをいただけています。

今、自分の目の前にある課題は多々あって、自分自身が育てなければいけないところも多々ありますが、一年の間にきっとまた一つ成長できると信じていることはできています。それは、一緒にがんばっている院生のみなさん、職場のみなさん、支えてくださ

っているスタッフのみなさん、普段は会うことのできない全国の先生方が私の先生として、仲間としていてくださるこの環境があるからだと思います。学ぶことを楽しみながら、一年間無理せず自分らし

く、自分育てをしていけたらいいなと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

藤田 未来 ふじた みき (高浜町立高浜中学校)



この度、ミドルリーダー養成コースに入学した藤田未来です。今年で教員生活15年目を迎えました。私はかつて「養護学校教員養成課程」の学生の一人として、この福井大学にお世話になりました。

現在6階にある「院生室」は、かつて私達の研究室があった場所です。この6階に足を運ぶと、仲間と共に過ごしたかけがえのない日々の思い出がよみがえり、懐かしい気持ちでいっぱいになります。ご縁があって再び、母校で学ばせていただくことができることに、大きな喜びを感じております。

私と福井大学教職大学院との出会いは、前任校である青郷小学校での教員生活に遡ります。今から5年前、青郷小学校に赴任することになりました。当時、教職大学院で学ばれていた先輩教員から、「学び合いとは」「授業者のためになる授業研究会とは」など、それまで出会ったことがない数多くの概念や実践を学ぶことができました。赴任当時、私が社会科の研究授業を行った際に、その先輩教員が授業研究会のコーディネートをしてくださったことがあ

ります。見取りの結果を授業記録に残し、子どもの姿から授業の展開を語り合う授業研究会が行われました。会議室のあちこちで小グループが形成され、子どもの姿を付箋に書き出しながらの子どもの姿を起点とした語り合いが活発に交わされます。グループワークの後には、授業者の私の前に、1時間の授業展開が「子どもの言動」が模造紙の中で克明に記録され、目に見える形となって現れたのです。各グループからは子どもの姿を起点として、学習課題の妥当性や授業展開の在り方について話し合われたことが発表されました。私は、模造紙の中に貼られた何十枚もの付箋を見た時、子ども達のつぶやきを必死に拾ってくれた参観者(同僚)の熱心さ、授業者である私を鍛えてやろうという同僚の優しさを感じました。心の底から、「やってよかった」と感じた授業研究会になりました。

現在は研究副主任を拝命し、子ども達のために自分ができること、やるべきことを日々模索し続けています。教職大学院での学びを最大限に生かし、「やってよかった」と同僚に感じてもらえるような校内研修や授業研究会を提案し、学校や地域に貢献できる人材になりたいと考えています。どうぞ、よろしくお願い致します。

八木 康文 やぎ やすふみ (美浜町立美浜中学校)



今年度、教職大学院に入学しました八木康文です。私は、大学卒業後1年間公立中学校での常勤講師、さらに県立高校での非常勤講師を経て採用となり、小浜市の小浜小

学校に新採用として着任しました。当時の先輩教員から学級経営や教科指導、生徒指導など多くのことを教わりました。新採用として着任した年から担任を任されることとなりとても緊張していたのを覚えています。悩むこともたくさんありましたが、先

輩教員の親身なアドバイスをいただきながら毎日の仕事に取り組んでいました。小浜小学校には3年間勤務しましたが、この3年間で学んだことが今の私の基礎となっています。

その後、美浜町立美浜中学校に赴任し、現在7年目を迎えました。その間1年生の担任を2度、2年生の担任を3度、3年生の担任を2度務めました。小浜小学校に勤務していたころは一番年下でしたが、美浜中では私よりも年下の教員も多く校務分掌でも重要な役割を任せられることも多くなってきました。また、異動してすぐの頃は中学校に慣れることに時間がかかり、さらに2年生の担任というこ

とで小学生と比べて大人である生徒との関わり方に悩むことも多くありました。しかし、同僚の教員との関わりや先輩教員からのアドバイスのおかげで何とか乗り切ることができました。昨年度までの6年間の勤務の中では、社会科ではふるさと教育に力を入れてきました。本校の近くにある若狭国吉城歴史資料館の見学、学芸員の方の講演、調べ学習を通して美浜町や嶺南地方の歴史についての学習を行っています。また、美浜町ではエネルギー環境学習に取り組んでいます。エネルギー環境教育推進委員として6年間美浜町でのエネルギー環境教育に携わっています。1年生では発電所見学を通してベストミックスのあり方について、2年生では地球温暖化の原因や影響・対策について、3年生では新エネルギーの学習を通してこれからのエネルギーについて提言を行うという活動を行ってきました。全国エネルギー環境学会にも平成23年度に山梨大学、平成25年度に島根大学でそれぞれ参加してきました。電力会社の方をはじめとして外部の方とも関わる機会が多くあります。

志村 智恵美

今年度教職大学院で学ばせていただくことになりました志村智恵美です。よろしく申し上げます。私は今、神奈川県厚木市立清水小学校に勤務しています。何故神奈川の人がと思われることでしょうか。東京や神奈川にもたくさんの教職大学院があります。しかし私の学び方に合っていたのが、福井大学大学院だったということです。福井大学大学院を選んだ理由は3つあります。1つ目は、現職教員のまま、学校で学ぶことができるということでした。私の教職員生活もあと十数年になり、自分のしてきたことの方角性は間違いないのか、また若い世代の仲間のためにできることは何かを考えるために、休職しなくて学ぶことのできる教職大学院を探していて、見つかったのが福井大学大学院でした。2つ目は勤務校を拠点として学ぶことができるということでした。私は今の勤務校で、たくさんの先輩方にたくさんの教えを受けて育ててもらいました。本校に赴任した8年前は、学年リーダーで一番年が下だったのに、今ではとうとう年の離れた一番上になってしまいました。先輩方に育てていただいたように、年の離れた後輩たちにできることは何なのかを考

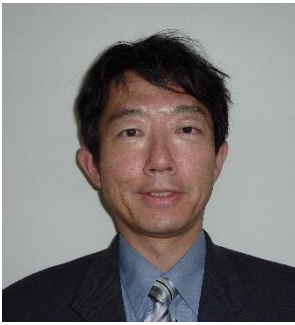
そして、今年度、教職大学院で学ばせていただく機会を得ることができました。今年度より研究主任となりまだまだ経験が不足している私は不安な毎日を過ごしています。そのため、教職大学院で他校の取り組みや様子を知ることができることは私にとってとても良い機会になると考えています。また、多くの先生方と接することで授業や研究において新しい視点なども手に入れたいと思っています。

本校は、ありがたいことにこれまで福井大学教職大学院の拠点校として取り組んできているので研究体制は整っています。私ができることは、前年度までの研究を実践し、振り返り、課題を見つけ、改善を加える。これを繰り返し行っていくことだと思っています。どれだけの実践ができるかは分かりませんが、美浜中学校に少しでも還元していけるようにしていきたいと考えています。2年間よろしく申し上げます。

しむら ちえみ (厚木市立清水小学校)

え、即職場で結果につなげていくためには、拠点校方式で学ぶことができる大学院がよいのではないかと考え選びました。最後に3つ目は、今の日本の教育界を引っ張る福井県や秋田県の教育に興味があり、この県の学びの形を知りたいと考え福井の地に来ました。

初めて福井の地に降りた時、澄み渡っている空気、地元の方々のやさしいお話の仕方が、自分の心を浄化させ、故郷にもどったような優しい気分にならせてくれました。毎月この地に来るたびに、このような気持ちになることができると思うとうれしさと胸がいっぱいになります。今年は6年生の担任になり、忙しい中での大学院生の学びになります。しかしこのような年だからこそ、大学院での学びが、今自分の悩んでいることや、困っていることの助けになってくれると思っています。合同カンファレンスでのみなさんとの学び合いで、たくさんのことを気づかされ、考えさせられました。これからこの学びを大事にして、今の自分を振り返り、さらに成長していけるようがんばっていきたくと思っています。これからどうぞよろしく申し上げます。



長谷川 有希

今年度、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました長谷川有希と申します。よろしくお願いいたします。

現在、勤務している伊井小学校は、全校児童74名の小規模校で、開かれた田園風景の中に大きな工場群とともに建っています。児童は全学年を通して仲がよく、素朴でのんびりとした雰囲気があります。半面、自主的、自発的態度にやや欠けているのが特徴です。

私は4月に入ってから、目の病気を患い入院することになったため、5月の合同カンファレンスが初参加となりました。異校種やインターンの先生方とのグループ協議は、年齢の幅も広く新鮮で、視野の広がるとも有益な時間でした。また、他の先生の仕事上の悩みや課題について共有しながらのグループ討議は、あっという間に時間が過ぎ去り、教育現場に山積する課題の多くは、そんなに簡単に方策が見い出せるようなものではないことも実感させられました。

私の研究テーマは、「確かな学力の定着と向上を目指して」であり、そのために、“何ができるのか、何をすべきなのか、何をどう働きかけるのか。”という強い課題意識を持って入学しました。まずは授業改善の必要性を筆頭に考え、5月に研究主任として自ら提案授業を行いました。大学院より指導教官である三田村先生をはじめ、2名の先生方が私の授

はせがわ ゆうき (あわら市立伊井小学校)

業及び研究会の様子を参観され、その日のうちにいろいろとアドバイスを頂きました。その一つが、授業改善の意識を学校全体の教員に働きかける研究会の持ち方です。これまで本校では、付箋を使って自由に討論する形式の研究会を行って来ました。そのスタイルを踏襲しつつ、もっと多くの発言が出やすい少人数での協議方法や、時間の途中でグループのメンバーを変えるクロスセッション方式の研究会を提案していただきました。さっそく次回の校内研究会で実践する予定です。また、6月の指導主事訪問日に予定している1年生国語の授業案検討会にも、三田村先生、小島先生に参加して頂き、多くの助言をいただくことができました。このように、私が大学院に通って学ぶというより、大学院の指導の先生方が勤務校へ足を運んでくださり、実践的な取組の中でご指導していただけることに、この大学院の学び方の大きなメリットを感じました。

大学院の指導の先生方は多くのノウハウを持っており、またそれらを実践してこられた先生方ばかりです。私はこの2年間、遠慮することなくどんどん勤務校に来て頂き、指導を仰ぎたいと思っています。また、同じく大学院で学ぶ先生方とも情報を交換し、学校を改革するマネジメント力だけでなく、人としても大きく成長できればと考えています。この2年間、よろしくお願いいたします。



一瀬 泰史 いちせ やすふみ (高浜町立高浜中学校)

今年度から、学校改革マネジメントコースに入学した一瀬泰史です。福井大学から100km以上離れた福井県の西端、大飯郡高浜町在住で、町内の高浜中学校に勤務しております。今年度で勤続5年目となります。

高浜中学校は、全校生徒321人の中規模の中学校で、教職員は約30名、この春の異動で職員の数近くが入れ替わり、再スタートしました。私自身も

初めての教務主任となり、忙しく充実した日々を過ごしています。

教職大学院では、今年度からの新設コース「学校改革マネジメントコース」に所属することとなりました。“新しい”ということは、自分たちの研究の軌跡がこのコースを形作っていくということで、身の引き締まる思いです。昨年までは、美術科主任・3学年主任としてある程度限られた守備範囲で活動してきました。管理職としての視点を持って学校を見つめ直していくことは、今現在管理職ではない自分自身にとって少々難しいことではありますが、

広い視野から捉えて研究を行っていきたいと考えています。

また、現在高浜中学校では、「ミドルリーダー養成コース」、「スクールリーダー養成コース」それぞれに1名が所属しており、高浜中学校としては、合計3名が教職大学院に通っています。これはとても心強いことで、学校の研究に対しても大学院と太くつながりながら、協力して当たっていけると考えています。また、2日連続の大学院の場合、夜の高浜中学校研究部会！が行えるという利点も感じています。

さて、みなさんは、「ブルーフラッグ」をご存じでしょうか。FEE（国際環境教育基金）という国際的な環境団体が行う、優れたビーチやマリナーを認める取り組みで、世界中で約50か国、約4,000か

所のビーチやマリナーが取得しています。ブルーフラッグは日本ではまだ認知度が低いですが、ヨーロッパなどの海外ではとても有名で、これを今年アジアで初めて高浜町の和田ビーチが取得しました。取得に向けては、町主導ですが、町民が環境を守っていくとする姿勢が必要で、美しい浜の環境を維持していくことが求められます。高浜中学校でも、地域の学校として、総合的な学習の時間を中心にこの取り組みに参加・協力してきました。取得によって、さらに地域を愛し、地域を盛り上げていくとする生徒が育って欲しいと願っています。そして、夏の海水浴は是非、高浜町へおいでください！



齋藤 実紀夫

今年度より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただいている齋藤実紀夫です。生まれも育ちも現住所も福井市ですが、新採用で坂井地区に赴任して以来、地区内小学校を

渡り歩き、地区内で勤務していない街は芦原町と春江町となりました。現在は三国南小学校に勤務し、教務主任5年目となりました。新任のときより体育主任を8年、生徒指導主事を10年経験してきましたが、ここに至って「教員になってからおおよそ2/3以上を他の教員を巻き込み協働して取り組まねばならない校務についてきたのだなあ。」という少々の驚きと「その場そのときの実践と改善(短期的な)に追われ、もう少し先を見通すことはできなかったのか。」という大きな反省につつまれています。教職大学院で学校改革について研究を進める中で、中長期的に改革・改善を捉えられる目とそれを実現していくマネジメント力を磨いていきたいと思っています。

現任の三国南小学校は、三国神社や旧三国町の街とコミュニティセンター(旧公民館)を3つ(三国、三国木部、東部)を校区に持っています。教職大学院で学び始めてから、地域にちりばめられている豊かな人的・物的な教育資源と現任校の特色である異年齢児童による縦割り活動・豊かな体験活動・学校行事を繋ぎ、受け取るだけでなく発信・貢献といっ

さいとう みきお (坂井市立三国南小学校)

た双方向的なかかわりを築いていきたいと考えています。また、このようなかかわりを持続可能なものにしていく大きな課題も見えてきました。

福井大学教職大学院の良さは、様々な人と出会い・語り合い・協働の場として互いに高め合っていくことを基本のスタンスとしていることだと思います。私もこの協働の場に身を置き、院生同士・ラウンドテーブルに参加されたような様々な職種の方々・大学院スタッフの方々…と反響し合いながら学んでいきたいと思っています。2年間ですが(つながりを考えれば、この先ず〜っと)、どうぞよろしくお願いします。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

子どもをみる力を養う 教職専門性開発コース1年 山内 愛音

週に3回の福井県立福井東特別支援学校でのインターンシップが始まり、4ヶ月が経とうとしている。4月の頃に比べると少しずつ学校の生活に慣れてきたように思うが、やはりまだ分からないことばかりである。

インターンシップでは、重度重複障害のある中学部の生徒とかわらせて頂いている。重度重複障害のある生徒と深くかわったことがなかった私は、インターンシップが始まるまで、生徒が学校でどのような生活を送り、どのような活動を行っているのかさえ知らない状況だった。インターンシップが始まり、生徒と初めて顔を合わせた時も、どうかかわっていけばいいのか、どんな声かけをしていけばいいのか、何も分からなかった。関わってくださる先生方が丁寧に助言してくださったことで学校生活についていくことができている。

しかし、授業実践については試行錯誤の繰り返しである。特別支援は指導書がない。私は、授業をから考えることが初めての経験であるため、難しさを感じている。

子どもの実態をできる限り把握し、そこから将来子どもが身に付けるべき力は何かを考える。そして、そのためにどのような題材で授業を行うべきか、どう展開させていくかを考えるというプロセスを踏み、授業を組み立てていく。授業をつくらうと思った時、私はまず、どのような題材で授業を行っていくかを悩んだ。しかし、どの題材が適当なのかを考えようとしても、何を基準に決めていけばいいのかさえ分からなかった。毎週木曜日に大学で行われる週間カンファレンスで教授にその旨を相談した。教授から頂いた助言は、「まずは子どもをみる事ができないと、授業はつくれぬ」というものだった。子どもの実態が分からなければ授業はできぬ、と頭では分かっていたつもりであり、4か月のインターンシップの経験から、少しは生徒のことも分かってきたつもりであった。しかし、先生から「どっちの手が出たの？どんな動き？」と、実際に生徒の様子を尋ねられると、答えられないことばかりだった。私は生徒について知っているつもりになっていただけで、実際には生徒をみる事ができていない、生徒について知らないことばかりだと気付いた。も

う一度生徒の様子を捉えなおすため、それまで書いてきた記録を見直したが、授業づくりの参考にはならないものばかりであった。これまで生徒のことをみてきたつもりであったのに、重要な視点を見落としてしまっていたのだと、改めて知った。この4ヶ月間、私は子どもたちの何を見てきたのだろうかという悔しい気持ちにもなった。それと同時に、子どもをみる事ができないと授業ができないという意味を実感した。

それから私は、授業をつくることを見通して、より生徒の様子を細かくみよう意識するようになった。授業をつくるためだけに子どもをみていくわけではないが、授業をすることを見通して観点を絞って子どもをみることで、より深く子どもを理解することにつながると思う。現在は、先生方からの助言を頂きながら、表情や視線だけではなく、手指の動き、表出があった時のまわりの環境についても観察していこうと心掛けている。それでも、生徒について先生方と話す時、自分と先生方ではみる視点がまるで違うことが多々あり、まだまだ子どもをみる力が弱いと痛感する。特別支援は、チームティーチングである。チームとして生徒をみていくためにも、今後、様々な先生方と、生徒の実態や将来必要な力について話す機会がある。その時には、未熟な私なりに、生徒について考えたことを先生方と共有し、先生方と同じ目線で子どもたちをみる事ができるようになりたい。

これからの2年間で、私は先生方と子どもとのかわりを観させて頂き、適切な支援とはどういうものかを学んでいきたい。今はまだ、子どもをみる力を養うことで精一杯だ。2年間で支援について考えることができるのだろうか、という不安を抱えながらも、焦らずに、目の前の子どもと向き合っていきたい。

また、今回のように「分かっていたつもり」が、やってみたら分かっていたに気づき、挫折することが何度も出てくるだろう。しかし、分かっていたに気づくことが、私にとっては大きな学びになると思う。漠然と重要だと感じていたことを、実際の経験を通して「分からない」と感じることで、少しずつ重要だと感じていることが明

確になっていく気がするからだ。インターンシップで経験したことをフィードバックし、自分を客観的

に見ることで、「分かっていなかった自分」をもっと見つけていきたい。

自分はどうしたいのか？ 教職専門性開発コース1年 田中 亮

「どうすればいいのだろう。」と考えることが多くなった。福井大学教育学部附属中学校でインターンシップをさせていただくようになって早2ヶ月と半分が経とうとしている。私は常に自分に自信を持てるような行動を心掛けたいと思っているが果たしてそれが生徒たちの為になっているのか、ただの独りよがりになっているだけではないのかと感ずることもあった。2年生の学年に入らせていただき実際に生徒と接していても、私はクラスの担任でもなければ副担任でもないといった中でどのように生徒達と関わっていけばいいのか、自分は「ここは生徒に注意を促す場面かな」と思ってもここで注意をしないのは担任としてのねらいがあって注意しないのではないか、などといったことを思うようになり、じゃあそこでなにもしない私はなんなのかと悶々と考えるばかりであった。

木曜カンファレンスで自分の今の思いを M1 の同期、M2 の先輩、院に在籍する先生に相談したところ小杉先生に「担任としっかり話す時間を持って、担任が生徒を注意したときは院生のあなたが生徒のフォローに入る。院生であるあなたが生徒を注意したときは担任がフォローをする。そういった二人の間での役割分担をしっかり決めてお互いの共通理解を図ることが大事なんじゃない。」といった言葉をいただいた。私はそれまで私が担任の負担になってしまっただけだと思いきや一人で考え行動することが多かった。翌週から担任と少し話をさせていただく時間をいただき、その中で今自分が考えていることやこういう時はどうすればいいか、といったような話をさせていただいたことで、自分が疑問に思ったことなどを担任に話し共通理解を図ることで、院生として学年に携わせていただいている1人として自分の役割を果たそうという気持ちになっていった。

それからは多少ではあるが学年団の一員として学級経営をしているという責任感が強くなった。

部活動では男子バレーボール部に関わらせてもらっているが顧問でもない私がどのように部に関わっていいか悩んでいたが、木曜カンファレンスで M2 の山田芳裕先輩から「亮がもし担任だったら、顧問だったらどうするか、どうしたいかを考え行動すべき。そのためには生徒と本気で関わらなければいけないね。」という言葉をいただいた。翌日からバレー部の顧問に私がどのような役割で部に関わればいいのかや、このような練習をしたほうがいいのかを顧問に話をさせていただいた。それによって私は生徒と一緒に練習に参加しながらプレーや技術の指導をするようにした。指導の方針についても話し合いをする機会も多く設けてもらっているので顧問との共通理解ができてきていると感じている。この関わり方が正しいか間違っているかは自分ではまだわかっていないが、生徒が部活を楽しんで一生懸命やっている以上、私も部に全力で積極的に関わってきたい。これが私なりの「生徒と本気でかわる。」だと今は思っている。

木曜カンファレンスでは他にも、校種、教科がばらばらな院生の3~4人グループをつくり、一人の院生の授業を考える活動も行われている。他教科からの専門とは違った視点からの意見は新しい発見にもつながる。また実際に院生が中、高の時に受けていた授業はどのようなものだったかを体験として聞けるのも授業づくりの参考になる。他にも大学生版 PISA という実際に院生が教育をめぐる問題について問題の作成、解答、評価を行う活動も行っている。

このようなインターンシップを通じた振り返りができる時間は私にとって新たな発見と1週間分のインターンシップ中の自分の行動や言動を見つめ直せる場でありとても大切な場である。

自分から求めていく 教職専門性開発コース2年 藤田 芳幸

福井の夏のラウンドテーブルも近づき、去年あったインターンシップの報告が待っている。それと同時に、教職大学院でも週間カンファレンス（以下、木カン）が進む。

木カンでは午前と午後とで、部が分かれている。

午前の部では、院生たちが行っているインターンシップに還元できるような授業が行われている。午前1では、院生が各々の一週間で行った実践を話したり、悩みを語ったりする中で、今のインターンシップをより良いものに変えていく授業である。教科や校種

が異なる仲間の話を聞く中で、あることに気付いてくる。教科、校種が違っていても似たような思いをそれぞれが持っているのだ。「自分は小学校の先生だから…」という思いが消えたのだった。午前2の今月のテーマは「授業参観」であった。自分が授業を見る時の視点を再確認しながら、参観メモに表出させていった。そのメモを使って、附属の渡邊先生の授業をさせていただいた。協力していただいた渡邊先生には感謝し尽くせない。最終週には、うまいこと授業を参観できたかどうか、授業を通して、見方の確認をしていった。それぞれが再確認した視点を持って、インターンに返れたのだろうか。少しの希望を持ちながら企画は終えていく。

午後の部は、公教育について考えていく時間である。午後1には、PISAづくりを通して、公教育を考えていく時間で、今月は「道徳教育」であった。自分の班では「道徳科における評価」について考えさせるPISAを作ろうと試みた。明らかに、院生が持ちよる資料の質が上がっているように感じた。資料を一見して読み解く力が2Cycle目にもなると、意識して選べるようになるのだろう。資料を選ぶというこ

とは、子どもたちが考える教材を精選していくことにつながるのではないのだろうか。それが、私がPISAづくりをする価値だと思っている。午後2では、先月から引き続いて院生同士で授業を作っている。院生同士というのは、一人の授業者の授業を2人で支えて作り上げていくという形だ。自分のグループでは、いきいきと自分のクラスの様子を語る院生の姿があった。その中で語られるクラス、子どもたちの課題に挑み、その手立てを共に教材を通して考えている。三人も集まれば、それぞれが体験したモノが提案され、さらに精製されていく。授業者も、支える側もともに学び合っていると感じている時間である。他者の視点を自然に、自分の中に入れていく感じ、他では中々感じにくいのかもしれない。

木カンは院生が中心になって行っている。それぞれが感じる課題を出し合い、合意形成されたものに関して解き深めていく。もちろん完璧な合意形成は難しいが、しかし、それらが将来に渡って役立つ視点ならば、やって損はないと考える。無駄にするかは自分次第。自分から学びに行く姿が求められているのだろう。

5月合同カンファレンス報告



5月合同カンファレンスに参加して 教職専門性開発コース2年 山田 芳裕

新しい年度が始まり早一か月。爽やかな風が吹き抜け、春の訪れを感じるこの頃、5月の合同カンファレンスに参加した。長期インターンシップ（以下インターン）をさせて頂いている中藤小学校にも新1年生が入学し、昨年度とはまた違った、明るく良い雰囲気が漂っているように感じている。新しい先生方をお迎えし、刺激のある日々を過ごしている。

今回ははじめにオリエンテーションとして、高浜中学校の北村仁志先生が、学校での協働探究の現状を踏まえた、これからの展望をお話して下さった。研究分野で述べられた、「つながり」を意識した取り

組みに感銘を受けた。3つの観点があり、①「教師」とのつながり：信頼感が生まれる。共通理解。②「教材」とのつながり：基礎基本の定着、子どもがのめり込む意識付け。③「子ども（子ども）同士」のつながり：アクティブ・ラーニングとの関連、以上の3点があると語っていた。この観点を日々のインターンでの経験を踏まえながら考察してみると、①では、学年のヨコのつながりの厚さ、職員室の良い雰囲気が浮かんた。先生方の仲が良く、全体で同じ目標に対して動いている姿をよく見る。教師同士のつながりがあることで、悩みも相談しやすいだろう。今の

環境に感謝したいと感じた。②では、日々のインターンでの授業実践に基づいて、様々な先行研究や教科書の読み込み・検討などを行っている。これまでに以上に先行研究を分析することの意義を見つけていることが出来ていると思う。③は、個人的に最も重要なポイントだと感じており、教師が求められるものでもあると考える。子ども同士のつながりを意識してこそ、良い授業に発展していき、更なるつながりを生み出すことが出来るのではないかと考える。

午前では、それぞれの学校で動き始めた状況についてグループセッションを行った。そこで、嶺南東特支の河端先生から「フォロワーシップ」についてのお話があった。若手教員の刺激を受けつつ、学校全体の取り組みがあるとお話して下さった。そのお話から、若手教師は、失敗を恐れずにチャレンジしていく姿勢が必要なのだと感じた。先生方が若手を育成していく環境を作ってくださっても、行動に移すことが出来なければもったいない。環境を大切に、チャレンジする心を持ち続けていきたいと思う。また、私は日々のインターンでの取り組みについて語った。「一人一人を尊重する視点」を持ち、インターンに臨んでいることをお話すると、木村優先生から「その先には何があるの？」と問われた。これまで私は「自分自身が一人一人を尊重する視点」が持てれば、それで良いと考えていた。しかし、その先には理想の子どもたちの姿があり、更なる先を見通した見方が必要であることに気付かされた。木

村先生のお話を聞いて、子ども達にも「友達を尊重する視点」を持ってもらいたいと考えた。そのためにもどのような授業・学級経営を行っていくのか考えていかなくてはならない。これまでの考えの殻を破ってくれた木村先生に感謝したい。午後では、これまでの実践記録を読み深め考察していく時間であった。今回私は、附属中学校大田先生の「教師の願いと子どもの振り返りをつなぐ単元のデザイン」を読ませて頂いた。リレーの実践記録であり、そこには子どもの主体的な学びの姿があった。その中でも私は、「子どもの“振り返り”で学びをつなぐ」という言葉に感銘を受けた。授業後の振り返りシートを用いて、次時の授業に問題提起を行う。その問題に対しての解決策を、子ども達が主体的に行う。体育の授業で、目標としている形であった。また、子ども達だけで考えさせるのではなく、重要な個所に絞って、教師の支援もあるとされた。教師の支援と子どもの学びの絶妙なバランスこそが、よりよい授業を形成していくのだと再確認した。私自身も授業実践を行う際は、今回学んだ事柄を混ぜ合わせ、自分の型を築いていきたい。

今回の合同カンファレンスでは、自身の経験を語る中で、多くのことに気付かされた。これをインターンで実践し、私という土壌に落とし込んでいきたい。有意義なカンファレンスになり、また一つ自分の知見を広げることが出来たと実感している。

共に語り合う スクールリーダー養成コース2年 小野 拓士 (カリタス学園小学校)

新横浜から新幹線「ひかり」に乗り、米原で「しらさぎ」に乗り換え福井へと向かう。帰りは、小田原からロマンスカーで帰ると楽だということを、最近になって気がついた。そんな教職大学院生活は2年目となった。4・5月の合同カンファレンスにて、M1の時と大きく違うのは、「長期実践報告は何を書くか決まった？」と聞かれることである。もちろん決まっているわけもなく、ちょっとしたプレッシャーを感じる瞬間である。しかし、それもカンファレンスが始まって語り合っているうちに忘れてしまう。5月のカンファレンスも学びの多い時間であった。

教職大学院にはインターンの若い先生方がいる。この日も、教師と学生の間にいるような自分の立ち位置に関して悩んでいる話を聞いた。そう言えば、自分も若い頃は、結構軽い呼ばれ方をしていたなと思出す。それがいつからかだんだん減ってきた。教師らしくなったのか、それとも親しみ感が少なくなったのか。逆に困っていることを相談しづらくなっていないのだろうか？ 40代になって、教師とし

ての自分がどう育っているのかと考えさせられる話題であった。体育のリレーについての実践（福井大附中）を読んだ報告を聞いた。5月はカリタス小でも運動会の季節であり、休み時間になると校庭で練習する子どもたちの姿で賑わっている。子どもたちはリレーが大好きであり、運動会本番では、子どもたちの真剣さに、毎回胸が熱くなってしまう。そんなリレーでも、走ることが苦手な子、練習に参加するのを避ける子を、どう参加させるのか。子どもたち自らが、技能面、戦術面において、自分たちを高めていける指導や声かけとはどんなものだろうか？リレーの持つ魅力を再認識した時間であった。

教職大学院にはベテラン教師も学んでいる。昔と違って忙しい。この忙しさは何だろうか？という問いは、福井だろうと、神奈川だろうと、公立、私立を問わず、毎回のように挙げられる話題である。その中で、研究をどう進めたら「チーム学校」としての協働なものになるのか、特別な支援を要する児童が増えてきたことへの対応など、どこの学校でも起こり得る話題を、共に語り合える時間は貴重なもの

だと感じる。お互いに、同じ教師だからこそ、全てを話さなくても、そこにある悩みや課題について想像がつくこともある。こういう語り合える時間を同僚との間にも築いていける工夫も、カンファレンスの語りの中にあると思うので探っていきたい。

また、普段はなかなかできない実践記録をじっくり読むことも学びになっている。今回は、3年生の算数（福井大附小）の実践記録を読んだ。ちょうど、同じころにカリタス小でも、新人の教師が同じ単元で授業研究を行っていたこともあり、それと照らし合わせて考えることができた。

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」 ～福井大学教職大学院で学ぶことの意義～

スクールリーダー養成コース2年 西 繁寿（福井県立高志高等学校）

カンファレンスに先立って、福井大学教職大学院の倉見先生から、論点の整理と方向付けがあった。「社会や学校を取り巻く環境が激しく変化するなか、教育現場においても価値観が変化し多様化している。それに伴って教員の職務も複雑化し「広い視野」, 「客観性」, 「柔軟な発想」が以前にも増して求められるようになってきた」。同時に、「このような状況を踏まえると「多様な経験を整理・ストックすること」「答えのないものに対する最適解, 固有解を協働で探っていくこと」「リーダーとして周りの持っている力を引き出していく能力」などが、現場に立つものとしてますます重要になってくるであろう」との指摘であった。日々の実践と理論を往還する大学院での学びは、まさにこのような力量形成に「ピッタリ」のものだと感じている。

福井大学教職大学院では、「現場における教育活動そのものが学びの対象」として受け入れられる。合同カンファレンスでは、現場での実践を各自が持ち寄り、グループセッションを行うことが多い。このグループセッションは、そのほとんどが「異校種異教科」にまたがって行われる。そのため、自分の実践報告では、校種や教科が異なっても伝わるように話さなければならない。これは、自分自身の実践を客観的に捉え直し、自身の立ち位置を確認するよい機会となっている。

入学してすぐの頃は、「共通の経験がないもの同士が話しをして、各自の課題や問題意識を深く理解し合えるのだろうか。実りある時間になるのだろうか」と不安に感じることもあったが、教育の専門家として数々の修羅場をくぐり抜けてきた大学院の同僚、高い力量を備えた意欲あふれる仲間には無用の心配である。それどころか、自分の実践の意味を

最後に、教職大学院には福井大学の先生方がいる。5月のカンファレンスでは、ものを投げたり、教室を出て行ったりする子どものきっかけは教師が作っている、教師に起因しているという話が印象的であった。これは、授業の様子をビデオでふり返ると見えてくるそうである。つまり、授業をどうするのかということなのである。自分の授業をふり返る。教師として、一番大事な基本を改めて考えさせられる時間となった。

見過ごしていたのは誰でもない、自分自身であることに気づかされる。

セッションでは、複数の同僚から実践報告がなされる。メンバーはそれぞれの経験と照らし合わせながら、その報告を共感をもって受け止めていく。そのとらえ方には多少の個人差もあるのだろうが、とらえ方が全く同じである必要はない。逆に、とらえ方の違いが新たな視点に結びついて、グループセッションが厚みを持っていく。校種や教科の壁を越えて発せられる「素朴な一言」によって、学びは本質にせまっていくのである。

5月の合同カンファレンスは、福井県幼児教育支援センター観寿子先生の活動報告から始まった。「子どもってすごい」という先生の一言が、今でも鮮烈に思い出される。福井県でも、保幼小接続を意識して全県的な取組みが進められている。連携推進カリキュラムの策定・実践、アドバイザー・園内リーダーの研修など、時代の流れをつかみ将来を予測したうえで1つ1つの政策が着々と進められていること、センターに赴任される前からの政策を確実に受け止めたうえで自分たちのアイデアを出し合い、よりよいものにしていこうと工夫されている様子が、先生の報告からひしひしと伝わってきた。その根本には、子どもの可能性や能力に対する尊敬や、子どもを想う愛情がある。子どもの可能性がより輝くような場を作り出すこと、その実現のために今与えられた立場で全力を尽くそうとされている誠意あふれる姿がうかがえる報告であった。

続くセッションは、各学校における実践研究の現状を報告し合い、それぞれの学校の現状と課題を探るグループセッションであった。大学を出てすぐに現場に立ち日々困難にぶつかるストレートマスタ

一の悩みや悔しさ、生徒指導において生々しい格闘を繰りひろげるベテランの葛藤・孤独感・責任感。特別支援の専門家として温かさのなかに見え隠れする高い技能と強い信念。合同カンファレンスで触れられるものは、日常繰り広げられる実践のほんの一面に過ぎないが、それでも先生方の活躍が私の頭の中には生き生きと映し出され、心にしみこんでくる。ここで耳にした一言一言は、いつの間にか私自身の実践とも結びつき私自身の中に取り込まれていくようである。

月1回のカンファレンスを通して、学校における

複雑な毎日が解きほぐされ一日一日の意味が浮かび上がってくる。生徒の成長を願い、教科指導の研究や生徒理解について同僚とやりとりする毎日。生徒とともに、同僚とともに、慌ただしい日常における最適解を探究する日々の学校生活。この日々そのものが、同僚や私にとってかけがえのないものである。

日常を振り返り、日常を意味づけ、明日からの活動に新しい視点をもたらすもの。これが福井大学教職大学院における、私の学びである。

附属中学校 第51回教育研究集会

「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」

平成28年6月3日(金)附属中学校の第51回教育研究集会を開催したところ、約500名方々の参加を受け、多くのことを学ぶことができた実り多き研究集会となった。附属中学校の教育研究集会は、1年間取り組んできた研究を全国に発信する中間発表と位置づけて行っている。今年度は、研究主題「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」の4年次として、サブテーマ「個の学びの深まりを生み出すコミュニティの学びをデザインする」を昨年度11月に設定し、「協働探究の学びの中で、一人一人の学びを深める」そのために「コミュニティの学びを成長させる」ことに焦点をあてて授業実践を積み重ねてきた。一人一人の深い理解の学びであるディープラーニングを生み出すための「個の学びとコミュニティの学び」、そのための「子どもの学びの見取りをどのように活かしていくのか」「将来の学びにつながる中学校の学びをどのようにデザインしていくのか」を考えながら4月から授業づくりに取り組んできて、そのプロセスも含めて公開する場となった。

研究集会では、10教科16本の教科授業と学年プロジェクト（総合的な学習の時間）として、3年生の



3年生社会科の授業

学級演劇プロジェクトの様子、学活として、音楽集会で初披露する2年生「学年のうた」の練習の様子の計18本の授業を公開した。

また、学校教育活動全体で「探究するコミュニティ」の学びに取り組んでいることを授業以外の活動

でも見てもらうため、生徒自身が主体的に取り組む活動の発表の場を組み込んでいる。一つは、本校の学校文化として、大切に継承してきている音楽文化の一環として、音楽委員会が企画運営する音楽集会に向けた全校合唱練習を公開し、生徒が自分たちの活動をより良いものにするための主体的協働的な学びを見てもらった。もう一つは、生徒プレゼンテーションとして、生徒活動の発表する場を設けた。生徒会執行部が主体となって、企画準備をし、リハーサルでは3年生が下級生に発表のアドバイスをするなど、縦のつながりの中で、これも主体的・協働的な活動になっていった。生徒たちも授業だけでなく、他



1年生学年プロジェクト発表

の活動も附属中の特色であると

いう誇りを持っているため、ぜひこの機会に知ってほしいという高い意欲をもって臨んでいた。生徒会執行部、各委員会、学校行事、部活動、学年プロジェクト、学年のうた、音楽文化など、小学校体育館全体を使ったポスターセッションをたくさんの参観者の方々に発表できたことは生徒たちにとって、発信することの楽しさと難しさを体感できる重要な機会となった。さらに、運営にも生徒が参画しており、生徒会執行部が企画して、参観者の方々の案内やチラシ配布などおもてなしの心で取り組んでいた。

教科の授業研究会では、小グループでの討議を導入する教科が増え、参加した先生方がより多くの発

言ができるようにしていったが、授業研究会の持ち方は今後も検討が必要である。

シンポジウムでは、シンポジスト秋田喜代美先生、鹿毛雅治先生、木下研究主任、コーディネーターとして牧田副校長のメンバーで行われた。「子どもたち一人一人の学びを深めるディープラーニングの授業づくり」について、本校が取り組んできた「探究するコミュニティ」の省察も含めて、今子どもたちに求められる学びとは何かについてお話をもらった。本校が求めている学びの方向性は、今求められる力

を培う学びそのものであるが、教師の意識や授業実践にはまだ多くの課題があることも指摘され、今後の研究に活かしくことができるシンポジウムの内容であった。

今回の研究集会では県・市教育委員会、大学、公立小中高校の先生方に指導助言、協力者として参画していただき、県内外から多数の参観者にきていただき、感謝申し上げます。ありがとうございました。

(森田史生)

平成28年度第1回運営協議会

5月25日(水)午前10時から、福井大学文京キャンパス、アカデミーホールにおいて、平成28年度第1回運営協議会が開催されました。はじめに石井バークマン麻子・教育学研究科長、次に古谷清和・県教育庁学校教育幹の挨拶の後、全体協議会及びグループ別協議を行いました。

前半の全体協議会では、次の内容が協議され、原案通り承認されました。

- ① 福井大学教職大学院の運営について
- ② 平成28年度年間計画(案)について
- ③ 平成29年度学生募集スケジュール(案)について
- ④ 拠点校・連携校担当教員について
- ⑤ 平成28年度教員免許状更新講習について
- ⑥ 要項改正について
- ⑦ その他(6月ラウンドテーブルについて)

後半のグループ協議では、県教育委員会、市町教育委員会、拠点校、連携校(2グループ)の5つのグループに分かれ、これまでの成果や課題、要望などについて活発な意見交換が行われました。



【県教委員会】

今年度新設された、学校改革マネジメントコースの意義について、多くの意見が出された。このコースでは、院生が、学校が抱えている様々な課題を解決する実践を行う上で、在籍校の校長先生にも加わってもらい、試行錯誤しながら取り組みを支援していくこと、夏の集中講座や6月と2月のラウンドテーブルでは、県内のビジネス界で活躍しているトップリーダーや県外大学のマネジメント研究の専門家を招き、世界的な動向を踏まえたカリキュラムづくりを検討していることを大学院から説明した。

学校改革マネジメントコースの院生は、管理職として学校の組織マネジメントの中心的役割を担うことを目指しているが、現職教頭、教頭登載者、管理職試験未受験者の院生が混在しているため、カリキュラムの守備範囲を広げ、院生の思いを汲んだカリキュラムを支えていく必要があることが話し合われた。

教育研究所や嶺南教育事務所、特別支援センターとは、教員向け研修や所員向け研修への支援・協力について要望がだされ、教職大学院として積極的に連携していくことの説明と意見交換をした。

【市町教育委員会】

拠点校と連携校の現職教員の負担や学びをどう勤務校で活かしていくのかについて建設的な意見をいただいた。大学院の2年間を学校から出て学ぶと学校運営に穴が開くので、実質上、学びは勤務校で行い、大学院へ通うのは、基本的に月間カンファレンスや夏休み中の集中講義等のみで負担を少なくしている。学びの活かし方については、各コースで他の先生方と語り合うことで、学校の課題をどう解決していくか、生徒指導や学習指導の成功例や失敗例を紹介し合うことで参考になるものを得て、学校に持

ち帰り管理職とともに解決していく手立てを学ぶ機会となっている。負担感については、続けているうちに慣れてきているようで、勤務校の校長先生の理解も進んでいる。今後は、自校だけでなく、周辺の学校を巻き込んだ課題解決ができるようにしたり、ここで学んだことを教頭研修や教育委員会の研修などで発表し、提言したりできたらよいと考えている。大学院も教育委員会などへの働きかけと、継続した院生へのアドバイスをお願いしたいとの要望があった。

【拠点校】

多くの拠点校から、学校の研究会、授業研究に教職大学院のスタッフの参加により、様々な視点から助言をもらっている、ストレート院生には戦力としてとても活躍してもらっている、児童・生徒も親しみをもって助かっている、学校としても生徒指導面のみならず、授業指導の面でも今後サポートしたいとの意見が出された。現職院生は、学校では中核的な立場を担っているが、より学びやすいようにするために、大学院スタッフと拠点校の先生方との関わり方、院生の経済的負担軽減、インセンティブの問題、拠点校としての契約について要望があった。

【連携校】

連携校（小・中・高）のグループからも主に学校改革マネジメントコースについての意見が多くあった。学校改革マネジメントコースの先生は、教職大学院での学びは、すぐ学校現場でアウトプットできる利点があるので、月間カンファレンスでの学びを学校運営に活かしてほしいとの声が多くあった。校長・教頭・教務主任とで週に1回集まり、一週間の流れや学校全体のことを共有・検討したり、校長が気づかないところをよくサポートしてくれたりしている。校長としても自分のやりたいことを研究して欲しいし、院生の先生の探究と一緒に探しながら学校改革を進めていけたらと思っているとの意見が出された。

高校からは、予習型授業に移行したもののなかなかうまくいっていない状況もあり、教科会などに教職大学院のスタッフが一緒に入り、第三者の目が入ることで緊張感が生まれ教員は真剣に検討できるとの意見があった。大学院からも教職大学院に来て欲しいということには、オーダーメイドで、フレキシブルに、学校の課題と一緒に取り組むことを再確認した。

連携校（特別支援学校、幼稚園）のグループからは、派遣している職員に会議の活性化をうながすファシリテーションスキルを身につけさせ、そのスキルをチェックしてもらいたい。院生の支援だけでなく、園の体制を含めて全体を見てアドバイスしてほしいと思っているので、ぜひ頻繁に来てほしいとの要望があった。大学院からは、大学をどうしたら上手に利用できるかを考え、管理職が学校を動かすときには、大学も協力するので、このような部分をアドバイスしてほしい、後押ししてほしいという要望を大学院に伝えてほしいと説明した。



これら運営協議会の各グループでの協議内容は、教職大学院スタッフで再度分析・検討を行い、関係学校、教育委員会との連携を深め、今後の教職大学院運営や状況改善に活かしていきたいと思えます。

（小島啓市）

【編集後記】早いもので、桜が咲く中での開講式から三ヶ月が経ちました。大学の木々からは蝉の鳴き声が聞こえ、季節は夏到来です。この間、院生の皆さんは、2回の月間カンファレンスにより、教職大学院での学びにも慣れ、実践の方向性が見えてきたのではないのでしょうか。先日の福井ラウンドテーブルでは、県内外から500名を超える参加者が集まり、各ゾーンで学びの報告を聴き合ったり、教育実践について熱く語り合ったりする姿が印象的でした。本学で学ぶ院生の皆さんにとってもよい刺激になったことでしょう。実践報告をしてくださった先生方、参加者の皆様、ありがとうございました。（小島啓市）

教職大学院 Newsletter **No.87**

2016.7.9 内報版発行

2016.7.23 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp